

学習指導案 解説（コメント）

5歳児（幼稚園）「園庭の恵みがもたらす暮らし」

実践者：お茶の水女子大学附属幼稚園 教諭 佐藤寛子

タイトル：自然環境とびわの収穫から育成する問題解決力

本実践で示されているように、幼児教育においては「環境を通して行う教育」が基本である。自然環境に触れることの重要性は幼稚園教育要綱の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中で「健康な心と体」と共に「自然との関わり・生命尊重」が示されている。大学構内には様々な木々があり、附属幼稚園にも園庭があるので園児たちには自然が身近なものである。

園庭のびわが5歳児と3、4歳児をつなぐ手段となり、びわを分かち合う心が生まれた。スーパーで見たびわとのつながりを園児が理解し、家庭や社会とのつながりを意識する手段ともなった。びわの収穫にあたっては、「高いところにある実をどうしたら採れるのか」という問題に園児たちは直面した。

本実践で育成されるコンピテンシーとしてはまず「問題解決力」「創造的思考力」が挙げられる。高いところにある実を採る方法を、教師の提案を修正する形で、園児は自分たちで考えた。他者とのつながりや仲間意識、他者と協働して問題を解決し、収穫物を分かち合うことは「他者理解」や「協働力」の土台をなしうるものである。自然環境と教師たちの支えが園児のコンピテンシー育成と心身の成長を促す実践である。